淡路島の産直青果生産者、アイ・ファームの佐々木さんの圃場に植えられ、元気よく育つひまわり

これまでもこれからも 福島の皆さんとつながっていく

東京電力福島第一原発事故によって、福島の被災地では自然と共生する暮らしや日常が奪われ、地域での人と人とのつながりも失われてしまいました。グリーンコープは※共生地域創造財団と共に、先の見えない不安を抱えながらも故郷で暮らしていこうと頑張っている人々に寄り添う支援を続けています。

福島の子どもたちが放射能の心配をせずにのびのびと外で遊べるよう、保養に取り組む団体の活動の支援を行っています。また、震災や原発事故を忘れてはいけないこととして伝え続けるために、組合員が被災地を訪れています。

グリーンコープが取り組んでいる福島の支援についてお伝えします。

※公益財団法人 共生地域創造財団
グリーンコープ・ホームレス支援全国ネットワーク、生活クラブが連携して、被災地の復興支援などに取り組みながら共生地域の創造をめざす団体

出会いを通して福島から学んだこと

グリーンコープは、東日本大震災直後から被災地で支援活動を始めました。活動を行う中で福島の人々との出会いがきっかけとなり、組合員が直接福島に赴き、グリーンコープが支援している人たちとの交流を深めています。

東日本大震災や東京電力福島第一原発事故の被災地を支援する中で、たくさんの学びがありました。被災された方々が孤立しないようにと始めたサロンやカフェなど、被災地での居場所づくりの活動は、災害が起きたから必要になったのではなく、地域に必要とされていたものでした。高齢化がすすみ、人と人とのつながりが薄れつつあるようすは、被災地に限らず日本各地に広がる課題です。被災地で居場所づくりの取り組みに関わることによって、地域に助け合える仕組みをつくることが、誰もが生きやすい社会につながると分かってきました。また、人と人とのつながりが被災地の人々の力になっていることを目の当たりにし、共助の大切さを実感しました。被災地の人々に寄り添うことを通して、自分たちの身近な地域にある様々な課題を解決するきっかけともなっています。

福島で出会った方々や団体を支援

葛尾村（かつらお）　2016年6月に帰還困難区域を除き避難指示が解除されました。葛尾村では村に住む人のやりがいや生きがいをつくろうと、全国の支援者と共に米作りに取り組んでいます。この取り組みを通して、村に昔から根付く「『結』の精神を掘り起こし、親戚のように助け合うネットワークをつくることをすすめています。

2018年より、グリーンコープの組合員も田植えや稲刈りに参加して現地の方々と交流を続けています。

※困った時にお互いを助け合う文化

全国の支援者と共に育てた葛尾村のお米で作った甘酒「ノマッシエ」。グリーンコープでも取り扱っています

米作りには毎回全国から100人を超える人が参加

花見山　花見山は、福島市の桜の名所として親しまれてきました。震災後、暗くなりがちな雰囲気を明るくしたいと、雑木林だったところに桜を植樹し憩いの場をつくる取り組みが行われています。この取り組みに共感したグリーンコープの有志で200本以上の桜の苗木を購入。植樹していただくことで被災者の方々の仕事づくりの応援にもなりました。現在も定期的に訪問し、苗木の生長を見守っています。

春には花見山が桜色に染まります

川内村（かわうち）　村全体の避難指示が2014年10月に解除され、村民の帰還がすすめられています。震災前より高齢化がすすんでいます。

共生地域創造財団では、「仕事づくり」「食の支えあい」「地域の食の伝承」などの活動に役立てたいという住民の意向を受け、キッチンカーを貸し出しています。キッチンカーは、村の取り組みや朝市に利用され、交流の場が広がっています。

キッチンカーでの支援のようす。温かい食事に笑顔が溢れます

南相馬市　避難指示を解除された行政区の中には、今なお放射線量が高い地域があります。

2015年、グリーンコープは南相馬・避難勧奨地域の会へ、使用しなくなった放射能測定器を寄贈しました。南相馬・避難勧奨地域の会では、福島県内各地の土の放射能を測定して土壌マップを作成し、行政や市民に土壌汚染の実態を知らせる活動を行っています。

グリーンコープが寄贈した放射能測定器

福島のお母さんと子どもたちを応援　福島ぽかぽかプロジェクト

「福島ぽかぽかプロジェクト」は、福島に住む子どもたちや家族を放射線量の低い地域に招待し、自然に触れて遊んでもらう保養の取り組みを行っています。参加した子どもたちは安心してのびのびと野外で活動することができ、保護者は放射能について日頃話せない不安な気持ちを話し、共有することができます。全国の支援者が寄り添い応援していることを伝える大切な場になっています。

グリーンコープは共生地域創造財団を通して食材を提供しています。

外でのびのびと走り回る子どもたち

保養先を訪れた組合員がスイートポテトを作って参加者と交流

参加者の声

●震災から8年たった今も寄り添っていただいていると知り、感激しました。繋がっているんだと感じました。ありがとうございます。

●3．11を忘れはしませんが、気持ちの奥に閉じ込めて生活している状態です。そんなや中、保養に参加できることは癒しであり、本音を話せたり、考えを共有できる貴重な場所です。

2019年7月の売電量	
神在太陽光発電所売電量 105,970kWh 定格出力1,057kW（309世帯相当）	グリーン未来ソーラー売電量 39,088kWh 定格出力376kW（110世帯相当）
平池水上太陽光発電所売電量 134,860kWh 定格出力1,260kW（368世帯相当）	若宮物流センター太陽光発電所売電量 5,261kWh 定格出力47kW（14世帯相当）
深年太陽光発電所売電量 160,000kWh 定格出力1,550kW（453世帯相当）	広島物流センター太陽光発電所売電量 4,960kWh 定格出力47kW（14世帯相当）
	グリーンコープやまぐち生協西部地域本部太陽光発電所売電量 5,054kWh 定格出力54kW（16世帯相当）

子どもたちの未来のために　No.134

「子どもたちに繋げていきたいもの」

みどりの地球をみどりのままで子どもたちに残すため、変わらず大切にしたいものがあります。それは、子どもたちにどのような“環境”を残してあげたいかということ。近年、地球温暖化、マイクロプラスチックの問題など、将来に向けての大きな課題があり、※SDGs(持続可能な開発目標)も話題になっています。

グリーンコープは「自分たちで使う電気は、原発を推進している電力会社任せにしない」「自然エネルギーによる電気を自分たちでつくり出していこう」と決意し、2013年に神在太陽光発電所をスタートさせ「グリーンコープでんき」に取り組んでいます。

自然エネルギーによる発電を応援し、原発に頼らない電気を使うことなど、私たち一人ひとりにできることを考えて行動することが大切です。子どもたちのためにも脱原発社会を実現し、クリーンなエネルギー、環境が大切だということを伝え続けていきましょう。

※SDGsは、2015年9月の国連サミットで採択されたもので、国連加盟193か国が2016年から2030年の15年間で達成するために掲げた目標です。

グリーンコープ共同体組織委員会

今年も福島から子どもひまわり大使を迎えました　7月26日～8月1日

グリーンコープは、「ひまわりプロジェクト」に2014年から参加し、福島の子どもたちを支援しています。毎年夏休みに取り組まれる「子どもひまわり大使（以下、ひまわり大使）」は、福島で暮らす子どもたちが支援者を訪問し、交流して感謝の気持ちと福島の今を伝えています。

2019年7月、グリーンコープやまぐち生協、グリーンコープ生協ひょうごが、福島からひまわり大使10人を迎えました。

ひまわり大使は報告会で、東日本大震災が起きた当時のことや、震災や原発事故後の困難な日々を乗り越えてきた方々から話を聞いて学習したことなどを組合員に報告しました。

ひまわり大使と組合員が交流したようすを報告します。

ひまわりプロジェクト

※NPO法人シャロームが行っている支援事業で、全国各地でひまわりを栽培して、送られてくる種を、ひまわり油「みんなの手」に製品化しています。その販売収益は、福島の子どもたちが放射線量の心配のないエリアで活動する（保養する）ことにも役立てられています。ひまわりの栽培を通じて、福島に暮らす人々と福島を応援する人々をネットワークでつなぎ、福島の今を伝えるために情報発信も行っています。

グリーンコープでは、組合員やさまざまな事業所、災害支援で出会った皆さんにも協力していただき、ひまわりを栽培し、種を届けています。また、製品化されたひまわり油の販売も行い利益を寄付しています。

※障がいがある人もない人も、共に生きる社会を目指して活動している福島のボランティア団体

▶ひまわり大使とひょうごの組合員と子どもたち

ひまわり油「みんなの手」

◀ひまわり大使とやまぐちの組合員の子どもたち

子どもひまわり大使の報告（一部抜粋）

●福島に住む私たちが、福島の状況を日本や世界の人たちに発信していきたいと思っています。全国の皆さんや世界の皆さんに支えられて元気にがんばっています。たくさんの方から力をいただきました。今度はこちらからたくさんの元気を分けられるよう、ひまわり大使の私もがんばっていきたいと思います。

小4女子

●震災のせいで家に戻りたくても戻れない人がたくさんいることを知り、軽く戻りたいと口にしてはいけないと思うようになりました。京都に避難してから8年経ちました。ここまでやってこられたのは、支えてくださっている皆さんのおかげです。こうしていつも支えてくださる皆さんのことは忘れません。私はここで出会ったメンバーを大切にして京都でがんばります。

小6女子

●震災が起こり、僕たちの生活は、電気も水もいろんな人の努力からもらったものだと分かりました。僕ができることは資源を大切にしていくことだと思います。福島はまだまだ復興の途中です。多くの人にもっと福島のことを知って欲しいです。

小6男子

●近年広島では水害が起こり、多くの方たちが被害に遭われました。そんな時でも僕たちや福島のことを思い、ひまわりを育ててくれたことに感謝しています。まだ小さい僕ですが、自分にできることを考えながらひまわり大使として、ひまわりの花のように困っている人を笑顔にできるように、災害が起きても支援の輪が広がるように活動していきたいと思います。

小6男子

やまぐち　7月26日～29日

ひまわり大使の中には初めて海に入る子どももいて、真っ黒になるまで海で遊びました

浜辺ではすいか割りをして盛り上がりました

7月26日、新山口駅に到着したひまわり大使をやまぐち理事長の佐々木春代さんたちが、手作りの横断幕を持って笑顔で迎えました。

報告会が行われる会場では、集まった組合員らが拍手でひまわり大使を迎えました。佐々木さんは、「ひまわり大使の皆さんに、山口に来てほしいという思いを持ち続けてきました。今日この日が実現したのが本当に嬉しくて、胸がいっぱいです。山口のことや福島のこと、お互いのことを知って、これからの未来について考えていきたいと思います」と挨拶しました。続いてひまわり大使からの報告があり、真剣なまなざしで報告を聴く組合員の中には、時折涙ぐむ人もいました。

翌日からは、秋芳洞（あきよしどう）の探検や花火大会、海水浴やシーカヤックなどを楽しみ、山口の自然を満喫しました。

7月29日、やまぐちで育てているひまわり畑を見学後、組合員は別れを惜しみながらひまわり大使を見送りました。

佐々木さんは、「ふるさとへの想いを大切に育んでいるひまわり大使と出会い、原発のない未来のために脱原発運動をさらにすすめていきたいと思いました」と話しました。

ひょうご　7月29日～8月1日

ひまわり大使が自分の言葉で福島の今を伝え、将来の夢を語りました

▲グリーンコープの食材を使っている薬膳料理のお店で、楽しいランチ

▶汗をかきながら、みんなでみかんとオリーブの苗木を植えました

ひょうご理事会では、ひまわり大使を迎えるにあたり、4月から準備を始めました。ひょうご理事長の清水園子さんは、「理事会では、まず受け入れる自分たちの想いを一つにすることから始めました。どうすればひまわり大使に楽しんでもらえるかいろいろ考え、具体的な計画など、何度も検討を重ねました」と振り返りました。

7月29日に新神戸駅に到着した一行は、海の見える宿に移動し、これからの行動を共にする組合員とその子どもたち、スタッフらと交流会に参加しました。翌30日、ひまわり大使が福島の今を伝える報告会が行われ、親子で参加した組合員も多く、定員50人の会場は満員となりました。

31日は、今回ひまわりを栽培した淡路島の産直青果生産者、アイ・ファームの佐々木和彦さんと交流しました。交流の記念に、みかんやオリーブの苗木を植え、ひまわり大使たちは佐々木さんの「一生懸命育てるので、いつか大きく育ったみかんの木を見に来てください」という言葉に大きくうなずいていました。

清水さんは、「理事会メンバーが一つになって『ひまわり大使』の取り組みに関われたことは、ひょうごが今後に向かう大きな力となりました」と話しました。